

巻頭言

一区切りに際して

前 宇宙開発委員長 松尾弘毅（昭和37/3. 航空学専修）

“おおすみ”のときに現場に居たのですから、随分と古株になったものです。

我が国最初の人工衛星に加えて、最初の惑星間飛行であるハレー彗星探査計画にも深く関わることが出来ました。我が国の宇宙開発史上最もめざましい（少なくとも私の好みでは）2つのイベントに参加できたのですから大変幸運だったと思っています。

その代わりといいましょうか、宇宙科学研究所の所長時代には、就任早々の打上げが失敗して、あろうことか3年余の在任中一度も成功を経験しない始めての所長となりました。誤解しないで下さい。失敗続きだった訳ではなく、我が国では一度失敗するとなかなか次を打上げさせて貰えないということです。宇宙はワンストライクアウトの世界だと言った人がいました。

私が退任してすぐに小惑星探査の“はやぶさ”が打上がりました。随分先のことだと思っておりましたが、6月に帰ってくる予定となっています。ご承知の様に、満身創痍の状態です。予断を許しませんが、それでも楽しみなことに違いはありません。

宇宙開発委員会に来て早々に、H-IIAの6号機が失敗し、地球観測衛星“みどりII”の失敗などもあって、再点検／総点検と、立て直しをお手伝いしました。H-IIAは勿論のこと“だいち”“きずな”をはじめとする衛星群にも強い思い入れがあります。近年ロケット衛星とも順調に推移していますが、その陰には産業界とJAXAにおける地道な努力の積み重ねがあります。この体制が風化しないように願っております。また、宇宙開発の根幹を担う輸送系については、その開発能力の維持が将来を目指すために必須です。

次の思い出は長期計画の策定でしょうか。これはJAXAの中期計画の元になるもので、十分な準備をして臨みました。

また私の好みになりますが、その中で一つあげるとすると、“探査”でしょう。当面科学が中心となりますが、それに人類の活動領域の拡大、国としての科学技術力の国際的アピール等の視点も加えて新たなカテゴリーを設けました。宇宙開発を先導してくれる“利用”があるというのは素晴らしいことですが、

宇宙開発をもっとも宇宙開発らしく感じさせるのは探査であるというのが私見です。私が委員になった頃はそんな考えは流行らないと云われたのですが、その後“はやぶさ”や“かぐや”の活躍



もあり、月に帰帰し更に火星への有人飛行を目指すブッシュビジョンの公表もあって、世の中とは変わるものであります。

月につきましては「月探査が国際的な側面を有する活動があることを踏まえ、我が国固有の理由によるほか、国際的な動向に即し、総合的な観点から適時適切に計画を見直すことが必要である」と述べました。近時のオーガスティン報告等を見ますと、米国が真っすぐ月を目指すかどうかは不透明で、上に述べた用心があてはまる形勢になりました。状況に応じて、柔軟な対応が必要でしょう。

有人についてはあまり踏み込めませんでした。人類の宇宙進出についてのMITのレポートに「人類の宇宙進出は歴史的必然であり、人類のDNAにはそれが刷り込まれているとの意見があるが、そのような歴史的、遺伝学的事実はない。全ては実行しようという意志に関わっている」という趣旨の一節がありました。全く同感ですが、議論を深める時期だと思います。有人飛行の意義の落ち着く先は「人間が行くこと自体に意味がある」ということであり、それに如何程の価値を見出すのかといういわば感覚的な判断になります。

私の立場は、有人飛行に大きな価値を見出す人が居ることは理解するが、私自身は、年齢のことは別にしても、訓練はかなわんなどいうところです。人間が行くこと自体に意義を見出しているのですから、この立場に立てば、代替物は意味がないこととなります。また、「我が国独自の有人飛行」とこと新しく云うとき、

